近世の旅と疫病の関係を探る研究の構築に向けて

Towards the Research on the Relations of Travel and Epidemics from the 17th to the 19th Centuries

谷崎　友紀
TANIZAKI Yuki

本稿は，近世の旅と疫病の関係性を探る研究について，これまで別個の議論であった近世の旅と疫病史という２つの既往研究を整理し結びつけることで，今後の研究の枠組みと意義を示したものである．はじめに，近世の旅や名所見物にかんする既往研究について，旅人の行動，旅先地域，旅を可能とした社会という３つの観点から整理をおこなった（2 章）．次に，近世の疫病史について，疫病の実態，疫病の伝播，地域史としての疫病という観点から整理をし（3 章），両者の議論を包括した（4 章）．その結果，これまで旅や名所にかんする研究は，戦・災害・疫病の流行といった非常時ではない平常時を対象としていたことが明らかにされた．すなわち，非常時のなかでも疫病の流行は人の移動と密接に関わるものだが，旅との関連がほとんど議論されていない，という課題が抽出された．この課題にたいして，最後に「近世の旅と疫病の関係を探る」研究の枠組みを提示した．

キーワード：旅，疫病，コレラ，歴史地理学，観光
Key Words: Travel, Epidemics, Cholera, Historical geography, Tourism

1　はじめに

日本の旅行史において，楽しみを目的とする旅行である観光は，近代以降の現象とされてきた．しかし，近世には伊勢参宮が流行しており，旅は特権階級だけのものではなく，広い階層の人々が旅に出ていた．つまり，近世には，すでに旅の「大衆化」がみとめられ，とくに 19 世紀には多くの人々が伊勢参宮を目的としながらも，その道中や名所を楽しむ旅をおこなっていた．観光現象は，決して近代に初めて出現した現象ではなく，それ以前から脈々と受け継がれてきた歴史をもつともみなされる．大衆化した近世の旅の実態について明らかにすることは，現代観光の本質を捉える 1 つの手がかりだと考えられる．

近代観光につながる近世の旅については，これまでも交通史・宗教史・歴史地理学といった諸分野における豊富な研究の蓄積がみられる．ただし，ここで対象とされてきたのは，戦や災害，疫病の流行といった脅威のない平常時における旅であった．

17 世紀初めと幕末を除けば，近世は戦のない平和な時代であり，それも旅が発展した要因のひとつだといえる．しかし，災害や疫病の流行といった脅威は幾度もみられた．浅間山の噴火（1783），安政の大地震（1855）などは，都市部を襲ったこともあり大きな被害を出した．疫病についても，麻疹は文久 2（1862）年の大流行までにも 20 ～ 30 年周期で流行を繰り返し，疱瘡も江戸時代の後期にはほぼ毎年流行していた．近世後期に新たな疫病として登場したコレラも，近代に入るまでに少なくとも 3 度流行している．このような脅威のなかでも，自然災害である地震や火山の噴火とは異なり，疫病の流行は人の移動と深く関係しており，過去の旅を考えるうえで疫病との関連を論じることは，旅行史を捉えるうえでも重要である．

これまで，近世の旅にかんする研究と疫病についての研究は，別々に議論をされてきた．本稿の目的は，別個の議論であった両者の研究を整理し，結びつけることで，近世の旅と疫病の関連について，今後の展望を示すことである．旅と疫病の関係を検討するに際して，現存している資料が比較的多い安政 5（1858）年のコレラ流行を主な対象とするが，既往研究の整理にかんしては，旅と疫病に関わるものを安政 5（1858）年に関わらずみていきたい．

本稿では，まず旅と名所の既往研究について整理をおこない（2 章），次に，近世の疫病史にかんする既往研究について述べる（3 章）．そして，両者を統合するような形で今後の展望を提示したい（4 章）．

2　近世の旅と名所にかんする研究

近世の旅や名所にかんする研究には，旅人に着目したものと，名所やそれを包括する地域に焦点を当てたものがある．高橋（2016）は，それを旅行者論と旅先地域論と称した．本稿でも，高橋の分類に倣い，①旅行者論，②旅先地域論と，加えて③旅を可能とした社会システムといった３つの視点から既往研究の整理をおこなう．

2.1　旅人の経路と名所見物

旅行者論は，旅人が自らの旅について記した旅日記を主な史料として用い，旅人の行動について検討したものである．旅日記から旅人の経路を復原しようとする試みは，とくに歴史地理学の分野において試みられてきた．ここでは，現存の確認されている旅日記の数の多い関東地方以東から，伊勢参宮を目的とした旅が主な対象とされた．旅人の経路の復原は，当時の旅の実態を明らかにするだけではなく，加えて当時の旅が宗教的なものなのか，娯楽的なものなのかという議論を可能とした．

東国からの伊勢を目指す旅人は，往路に東海道を利用し，復路に中山道を通ることが多い．目的である伊勢参宮を終えた旅人たちは，奈良・大坂・京都などへ立ち寄って名所見物をしていた．このような旅人の行動は，宗教的な行為である伊勢参宮を果たしたのちに，娯楽的な名所見物をおこなっていると捉えられ，近世の旅は信仰と娯楽の両側面をもつものだという主張がなされた（小松 1986，桜井 1986，田中 1987・1988，小野寺 1990）．これに異を唱えた岩鼻（1987）は，旅人がおこなう宗教的な行為は旅日記に記されないことも多く，近世の旅が娯楽的であると捉えるのは早計であると指摘した．

上述のような議論の際に用いられた旅日記は，主に農村の庶民によるものであった．しかし，旅人のなかには都市に住む学者や武士といったさまざまな属性の者が含まれる．高橋（2016）は，旅人の属性についても整理したうえで，近世の旅の性質を，信仰，観光，追憶，養生の４つだと指摘した．彼によれば，庶民による旅は寺社参詣を中心とした信仰的なものであり，付随的に観光がある．また，知識人の旅は，信仰でも観光でもない，歌枕などに関わる追憶の旅であり，ほかに養生を目的とした湯治があげられるというのである．

このように，旅人の属性に着目し，その行動の差異についての検討もされてきた．原（2005）は，鎌倉における旅人の行動を分析した結果，知識人と庶民では名所見物行動が異なり，それは知識人が庶民に比べて鎌倉にたいする歴史的な知識を有していたからだとした．

同様に，越後においても，知識人と庶民の行動の違いについて，庶民は親鸞の史蹟である「二十四輩巡拝ルート」をめぐるのにたいし，知識人はそのルートに加えて，当時の越後にかんする出版物に示された「越後七不思議」を訪れるといったことが指摘されている（渡部 2013）．

さらに，武蔵国からの旅人を分析対象とした拙稿でも，多くの旅人が伊勢参宮ののちに訪れた京都において，経路が定型化し，訪れる名所が地理的にも限定された庶民による見物行動と，名所を網羅的にめぐり，行動範囲が広い知識人の行動について明らかにされた（谷崎 2017）．

これらの研究は，高橋（2016）のいう旅行者論に相当するものである．旅人のすべての行動をミクロに復原するには，地域ごとの事例の蓄積は今後も期待されるものの，伊勢参宮を目的とした旅のおおよその経路や旅先における名所見物については，後述する案内記の研究成果もあわせることで，詳細に明らかにされてきたといえよう．

2.2　旅人が訪れた旅先地域

2.2.1　旅人の増加と地域社会

一方で，旅人を受け入れる側である地域については，旅先地域と定義をされた．これには，当時旅人が訪れた地域が該当し，旅人の増加にたいする地域社会の対応や変容といったことが議論されている．

青柳（2002）は，富士山参詣者と山麓の信仰登山集落について，18 世紀後期からの富士参詣流行を受け，どのような影響が生じたのかを検討した．その際には，ヴァーレン・L・スミス（1989：2018）のホスト・ゲスト論の概念を援用し，信仰登山集落をホスト，参詣者をゲストとして両者の関係を考察している．富士参詣は，18 世紀後期になると一見の参詣者が増加し，従来の師壇・定宿関係が弛緩化したことによって，宿泊業者同士で客引き合戦が過熱した．それにより，村内の秩序が乱れ，参詣者の受け入れをめぐり，村と信仰登山集落が対立することとなったが，幾度もの争論を経て経営上のルールが蓄積され，「観光地」として成熟していったという．

このような地域社会の動向は，「地域社会史」として論じられた．ここでは，旅先とされた地域が，参詣者の行き倒れといった事態や，参詣者の増加により地域に悪影響が生じたといった「有事」において，どのような対応をおこなったかが示されている．多くの旅人を受け入れることで生活が成り立っている「観光地」として，旅人を地域から締め出すことなく，円滑な運営をおこなう様子がわかるものである．

また，高橋（2016）による草津の湯治場にかんする事例においては，温泉をめぐる地域社会の動向と藩＝領主権力の対応について論じられている．この議論では，天明の飢饉ののち，地域から提案された温泉の収益を飢饉で疲弊した地域の復興に充てようという対応策について，仙台藩が懐疑的であり，実現しなかった事例が取り上げられた．湯治場を内包する地域は，現代の観光産業のような財源の利用を考えていたものの，藩はそういった「観光」を促進させるようなことはなく，保守的であったようである．

旅人を迎え入れる旅先地域では，増加する旅人に対応したり，そこから得た収益を活用したりするような動きがみられた．多くの旅人が訪れる旅先地域は，「観光地」として成熟し，さまざまな事態に対応できるようになっていったのである．

2.2.2　旅先地域の名所と名所観

旅人と旅先地域を結びつけるものとして，出版物があげられる．近世には，出版文化も隆盛したことから，旅や名所にかんする書籍や浮世絵などが出版された．とくに名所案内記と称される現代でいうガイドブックに相当する書籍は，旅先地域について，その地域でどういった場所が名所とされているのかという視点や，当時の景観復原の史料として研究対象とされてきた．

加えて，上杉（2004）は，人々のもつ名所にたいする認識を名所観と呼び，案内記を用いてその分析をおこなった．主な分析対象は 17 世紀の大坂であったが，この論稿では大坂・京都・江戸の名所観がそれぞれ異なっていることが示された．地域によって，人々が名所として認識する場所に差異や特徴がみられるのである．

同様に，長谷川（2010）は『都名所図会』（1780）の図像分析をおこない，作者の秋里籬島がもつ京都についての名所観について論じた．ここでは，京都人である籬島が皇都であった京都にプライドをもっており，内裏を神聖な空間として演出していることや，徳川幕府の象徴である二条城を小さく，平安時代の京都を象徴する神泉苑を誇張して表象していることなどから籬島の認識を読み取ることができると指摘されている．

一方，塚本（2006）は京都を題材とした案内記を GIS によって通時的に分析し，名所の経年変化について言及している．そこでは，道路に近い名所の記載率が高くなり，アクセスの悪い名所は記載率が低くなることが指摘されている．ただし，多くの案内記に共通して記載されるような，案内記が作成される際に核となったと推測される名所については，記載の有無に大きな変化はみとめられなかった．京都においては，案内記に記載されたり，旅人の訪問数が多かったりする名所見物の核となる名所は，ある程度固定化されていたといえよう．

しかし，京都以外に目を向けてみれば，新たな名所が発生する現象は珍しいことではない．17 世紀の大坂では，過去に由来をもたない「現在」賑わっている場所が名所として認識されていることが指摘されており（上杉 2004），幕末には天保山も新たな名所として誕生している（内海 2020）．また，紀州の和歌の浦では，和歌山藩が和歌の浦の景観整備をおこなうなど，人々を集めるための名所を発生・整備しようという動きはさほど珍しいものではなかった（薗田・藤本 1991）．

さらに，詳しくは後述するが，安政 5 年にコレラが流行した際には，駿州において三峰神社への参詣が流行した（高橋 2003）．また，コレラからの守護神として加藤清正を描いた「コレラ絵」の出版がされるなど，疫病の流行により新たな信仰対象が発生している（伊藤 2001）[1]．

このように，名所には地域によって特徴がみられた．地域によっては，名所や名所観は一定ではなく，新たな名所が発生することもあった．そしてそれは，当時の社会背景にも関連する現象であったと考えられる．旅や名所にかんする出版物からは，そのような名所の変化や背景を読みとることができるのである．

2.3　旅を可能とした社会とシステム

本章の最後に，近世に旅文化を隆盛させた社会のシステムについて触れておきたい．江戸幕府は，人々が自由に娯楽的な旅をすることを禁じていた．しかし，寺社参詣といった信仰目的の旅や，湯治といった医療行為はその範疇ではなく，人々は参詣や湯治を目的として旅に出ており，実質的には自由で娯楽的な旅をおこなっていたのである．

旅が盛んになることで，近世社会には旅を円滑におこなうため，旅人を保護するためのさまざまなシステムが生まれた．そのひとつに往来手形があげられる．往来手形は関所を通過するのに必要で，旅人の在所や旅の目的などが記されるパスポートのようなものであった．

柴田（2016）は，この往来手形に着目し，そこに記された「旅行難民救済システム」についての検討と，近世のシステム化された旅からこぼれおちてしまう人々について論じている．これによれば，往来手形には，所持する旅人が旅先で病に倒れた際，不運にも命を落としてしまった際には国元まで送ってくれるよう書付があり，旅先で困難に遭った場合でも救援を求める仕組みができていたという．

ほかにも，松本（2000）が旅先で行き倒れになった事

例について取り上げている．ここからも，近世社会には旅先で不慮の事態が生じてしまった際の対応策が存在していたことがわかる．

旅人の行き倒れは，旅人やその行き倒れた旅人を受け入れる地域にとっては，いわば非常事態である．しかし，少なくとも往来手形が機能し始めた明和 4（1767）年以降は，こういった事態にも対応できるシステムが整っていたといえよう．

この旅人への救済システムを疫病の流行といった視点に引きつけて捉えたものに，山神（2021）の取り上げた事例がある．この事例では，筑前国の宿場町である木屋瀬宿に残された庄屋文書から，旅人が病になった際に国元まで継送りにされる過程を紹介している．コレラ流行の際にも，この地域では大きな混乱はみられず，これは日頃から宿場で病人が発生した際の対応が順序だてて決められていたからだとされている．

ここまで，近世の旅や名所，旅を可能とした社会のシステムについて，疫病の流行とも関連するものを中心に整理をおこなってきた．これらの課題として，旅や名所にかんする研究のほとんどは，平常時の旅を対象としていることがあげられる．これは，近世の旅の多くが伊勢参宮であり，それが娯楽性を含むものであるためだと考えられる．よって，これまでの成果に加えて非常時における旅や，そこから生じた名所について検討を進めることは，近世の旅の実態や，当時の人々がもっていた旅への認識を考えるうえで重要である．

3　近世の疫病

3.1　歴史のなかの疫病

非常時といえば，災害や疫病の流行，戦などがあげられ，そのなかでも旅＝人の移動と密接にかかわるのは疫病の流行である．

人々は，古くから病に悩まされてきた．そしてその記録は，史料のない時代は骨の傷に，文献史料が残る時代には文字や絵画として残されている．なかでも近世は出版文化の隆盛した時期であり，庶民による旅日記が残っていることからもわかるように，寺子屋の普及などによって人々の識字率の向上もみられた．多くの人々が，病にかんする書籍を読み，自らも記録する時代になったのである．

こういった記録を紐解くことで，日本における疫病の歴史を医学史としてまとめたものに，富士川游の『日本疾病史』がある．ここでは，古くは古墳時代から，江戸時代末に至るまでの膨大な記録を収集し，それぞれの疾病について，名義，原因，証侯（病因，病勢など），療法などの歴史を叙述している．

富士川は，疾病のなかでも「一定の時期に，同様の性状をもって，国民の多数を侵すものあり．これを綜括して，疫病と称す」（富士川 1912）とした．流行病[1]については，さらに項目が立てられ，詳しい歴史が述べられている．日本の疾病史・医学史は，この成果が嚆矢だといえよう．

酒井（1999）は，疫病とは，「ある病気が次から次へと急速に広がり人々を倒し，それぞれの社会に計り知れない影響を与える病のこと」だとしている．ここでは，ペスト，エイズ，コレラ，天然痘，癩，梅毒，結核といった疫病が取り上げられ，こういった疫病が人類に与えた影響について論じられた．

同様に，日本の歴史に限定し，それを病という観点から捉えたものとして，酒井（2008）の成果があげられる．ここでは，縄文・弥生時代から明治時代まで，各時代におけるさまざまな病とその捉え方が著された．流行する疫病や，それを人々がどのように捉えるのかは，その時代によって異なる．古代の人々は，疫病を神の怒りによるものだと捉え，医療行為ではなく祈祷をおこなった．時代が下ると，医学が発展し，医師による治療がおこなわれるようになるが，それでも人々は神仏に祈る行為も並行しておこなうのである．これは，人々のもつ疫病観とも呼べるものである．

こういった病から人類史を捉えなおす試みに加えて，特定の病に焦点をあて，その実態を明らかにしようとした論稿もみられる．先述のように，日本の近世には多くの書籍や浮世絵といったものが出版され，市井の人々も記録を残すようになった．このような史資料から，近世の疫病について研究の蓄積がみられる．

近世には，疱瘡・麻疹・コレラ・インフルエンザといった疫病の流行がみられた．そのなかで鈴木（2012）は，麻疹に焦点をあて，当時の触書，浮世絵，書籍などから，麻疹の流行の実態や，人々がどのように麻疹の流行を受容したのかについて論じた．近世，麻疹は 20 ～ 30 年おきに計 14 回流行し，その年ごとに人々の麻疹の受容には特徴がみられた．18 世紀初頭の流行では，中国医書に記された麻疹禁忌が伝えられる程度であったのが，安永 5（1776）年になると，医師が医学書を頼りに治療をおこなうようになり，文政 6（1823）年には素人向けの養生書が登場するのだという．そして文久 2（1862）年にコレラとともに流行した際には，人々は麻疹神を鎮めるための祭りをおこない，麻疹に効くとされたものや薬の物価は高騰するなど，江戸の町は大騒ぎとなった．麻疹にかんする「メディア」によって，一般民衆の間にも，麻疹についての知識が蓄積されたことで大騒動となったのである．近世の麻疹の歴史からは，医療情報とその媒体，人々の受容の

変化が如実に現れているといえよう．

3.2　流行の伝播過程を検討する

3.2.1　寺院過去帳の利用

疫病がどのように伝播したのか，どういった流行のパターンがあるのかといった課題については，主に歴史地理学の分野において検討が進められてきた．その際に利用されたのが，寺院過去帳である．寺院過去帳とは，寺による檀家の人々の死亡記録であり，これを分析すると年月別の死亡者数を把握することができる．そのため，近代統計が整備される以前の歴史人口を検討する際に用いられてきた．

そのなかで菊池（1978）は，文政 5（1822）年，安政 5 ～ 6（1858 ～ 59）年，文久 2（1862）年のコレラ流行について，死亡者数の増減から流行のピークや伝播の過程について検討した．近世日本におけるコレラの最大の流行は安政 5（1858）年とされていたが，この分析の結果，安政 5（1858）年よりも 6（1859）年の被害が多く，流行の範囲が最も広かったのは文久 2（1862）年であったことを指摘した．流行規模の大きさとしては，文久 2（1862）年，安政 6（1859）年，安政 5（1858）年の順であり，安政 6 年は新たにコレラ菌が侵入してきたのではなく，前年の流行の残り火再燃型であると結論づけられている．一方で，文久 2（1862）年の流行は長崎から菌が侵入した単独流行であることも指摘されている．さらに菊池（1985）は，『日本疾病史』では東北にコレラの伝播はなかったとされていることにたいして，庄内地方の寺院過去帳を用いてミクロな分析をした結果，酒田地方において安政 5（1858）年に侵入したコレラが，翌 6（1859）年に流行していることも明らかにした．

菊池（1978）が対象としたのは，長崎，熊本，広島，高知，萩，米子，新潟，弘前，高山，上田，江戸，石巻，宮古といった広い範囲の複数都市であった．これは，マクロな視点から近世のコレラ流行について捉えようとした試みだといえる．

これにたいして，コレラの伝播に大きく関わる陸路の移動に着目し，当時の大都市であった京都・江戸間での伝播について検討したのが，野村（1994）である．ここでは，京都・江戸とその間の東海道・中山道が通る各地に残された寺院過去帳が分析対象とされた．その結果，文政 5（1822）年の流行は，京都での被害は少なく，東海道・中山道ともに死亡者数の明瞭なピークはなかったことを明らかにした．また，安政 5（1858）年については，京都での流行のピークが 9 月上旬である一方，それより東にある箱根・吉原で 8 月上旬にピークがみられることから，西国大名の参勤交代による影響を指摘している．さらに，コレラの伝播と地形との関連にも着目し，東海道については，大堰川や天竜川といった交通の難所といわれる大河が，コレラの伝播を阻害する要因になったのではないかと述べている．加えて，文久 2（1862）年の流行は，文政・安政の例のように侵入口にかんする記録がないこと，一部地域では万延元年にも再々発した記録があること，流行地が安政年間の流行地に限定されていることから，文久の流行は安政の流行の継続とみる“江戸期コレラ二大流行説”を支持するとした．

これらの研究では，統計や記録の乏しい近世において，当時の死亡者数が記録されている寺院過去帳を用いることで，正確な流行の規模や伝播過程を明らかにしようと試みている．疫病の流行という非常時には，その被害についての流言が飛び交い，大げさな誤った情報が記録されてしまうことも多い．そのようななかで，統計資料に近い性格をもつ寺院過去帳の分析は，正確なコレラの流行規模や伝播過程を把握するために大きな意義をもつ．

ただし，寺院過去帳は，すべての地域に現存しているわけではない．また，疫病の流行下において当該地域の人々の対応や，その認識を知るためには，日記をはじめとした記録類の分析も必要である．

3.2.2　日記やその他の史料の利用

近世後期の沖縄を含む南西諸島における天然痘の流行パターンを明らかにした小林（2000）は，大島・喜界島・徳之島・沖永良部島の年代記である代官記類を分析対象とした．この史料からは，天然痘が流行した年と，その被害の規模，その際にとられた対策などを把握することが可能となる．この史料からわかる範囲での流行の頻度，罹患率・死亡率を検証すると，その流行パターンは Cliff and Haggett（1989）の示した麻疹を例とした感染症流行モデルのうち，人口規模が小さいものに類似することが指摘されている．さらに，天然痘の流行への対策として，八重山諸島と奄美大島では病原体の侵入を防ぐため船舶の入港の規制，他島から入島した者の隔離，人痘法の施行といったことがおこなわれた．

記録類から把握される流行規模は，過去帳から明らかにされたものと比べると正確ではない．しかし，過去帳の分析が困難な地域において，このような記録類は，流行の対策も含めた疫病流行の実態を知るうえで重要な史料である．また，島という立地も関係するのかもしれないが，防疫のための交通政策がとられていたという点は興味深い事

例である．

同様に，川口（2001）は，幕末の多摩地域でおこなわれた牛痘種痘法について，地域の人々が残した日記史料を手がかりとし，当該地域に種痘が普及する過程と，その効果について論じた．ここでは，複数の日記に表れる種痘にかんする記述の整理により，種痘医の空間的な動きが可視化されたことで，多摩地域における種痘は嘉永３（1850）年から開始され，文久年間（1861-1864）には平野部においてある程度普及したことが明らかとなった．その結果，天然痘による子供の死亡者数は減少したという．ただし，このように新たな医療が導入されるなかでも，天然痘を避けるための信仰行事も並行しておこなわれていたようである．

この研究では，地域の住民が書き記した日記史料が分析対象とされている．こういった日記史料からは，当時の人々が疫病をどのように捉え，どういった対策をとったのかを知ることができる．後述するように，このような史料は地域史の一部として取り上げられることも多い．

用いた史料がやや特殊なものとして，渡辺（2010）による米沢藩領中津川郷の天然痘にかんする論稿があげられる．この地域には，「疱瘡人改」と呼ばれる天然痘の発症記録が残されており，それを用いることで近世農村社会における天然痘の伝播過程について考察された．ここでは，村落間・村落内・世帯内という３つの空間スケールが設定され，それぞれにおける伝播過程の検討がおこなわれた．その結果，村落間の伝播については，罹患者の大半が10歳以下であり，彼らの行動範囲は比較的狭く，さらに積雪や農閑期の副業労働による行動の制約によって，他村落との往来があまり活発ではなかったことから，伝播の速度が麻疹に比べて緩慢であったことが指摘された．反対に，村落内・世帯内での伝播は急激であり，その理由として，米沢藩が罹患者への扶助･交流を促す政策をとっていたこと，当該地域に疱瘡患児を見舞う習俗があったこと，幼少期に天然痘に罹り快癒を祈る疱瘡神信仰があったことがあげられている．

これまで疫病の伝播を検討した研究については，ミクロな空間スケールであっても村落間の伝播を分析するものが限界であった．そのため，村落内・世帯内といったさらに狭いスケールで疫病の伝播について検証し，さらにその結果を地域の習俗と関連づけて論じられた成果は，貴重なものだといえよう．ただし，渡辺（2010）自身も述べているように，このような正確な疫病の発生記録は希少であるため，得られた成果を比較検討することが難しい．今後，新たな史料の掘り起こしが進むことが期待される．

3.3　地域史としての疫病流行

先述のように，地域に残された日記史料を用いた疫病研究は，地域史の一部として取り上げられることもあった．とくに，安政５・６（1858・59）年のコレラについては，各地に流行時の記録が残されており，そういった史料の検討が進められている．それに加えて，2020年からのCOVID-19の世界的な流行を受け，さまざまな地域における過去の疫病流行の事例に焦点があてられるようになった．

高橋（2003）は，駿河国大宮町において，庄屋の日記である『袖日記』を用い，安政５（1858）年のコレラ流行時の地域の混乱状況や，地域住民がとった行動について明らかにした．正体不明の新たな疫病にたいし，大宮町の人々は，謎の病の原因が「管狐」という狐憑きの一種だという当時の噂を信じ，狐への対策として三峰神社の御犬を拝借するといった行動をとった．さらに，駿河国の別の村においては，疫病への対策として京都の吉田神社を勧請することとなり，村人が混乱した状況のなか吉田神社まで旅をした記録が紹介されている（高橋 2004）．未曾有の混乱のなか，地域住民たちが何とか災厄から逃れようと，日常の信仰圏外である三峰神社や吉田神社への働きかけをおこなっており，疫病の流行と人々の疫病への認識，信仰対象の関係がみえる事例である．

高橋（2003）と同じ史料を用いて，鈴木（2021）は，近年グローバル・ヒストリーの文脈で捉えられてきた疫病を「個人の経験」という視点から捉えなおそうと試みた．ここでは，医者によってコレラの医学的な治療方法が提示されているはずの人々が，コレラの症状を「管狐」の仕業だと結論づける考え方にたいし，たとえ医学的な知が提供されても，その受容の仕方は当事者がもともともっていた情報や，病のイメージに規定されるとした．コレラは当時新しい感染症であったが，人々はそれをもともと存在した狐憑きと結びつけて考えることで，新たな疫病観ともいえるものを獲得したのである．

また，甲斐国には，『暴瀉病流行日記』という安政５（1858）年のコレラ流行時の記録が残されている．これを記したのは地域の名主であり，この日記の存在自体は自治体史で取り上げられていた．しかし，甲斐国におけるコレラ流行時の全体像については不明なままであったため，この記録と町年寄や地域の神主の日記があわせて検討された（中野 2021）．ここでは，甲斐国でのコレラ流行は７月下旬から９月であったことや，韮崎・小淵沢といった大きな宿場町で多数の死者が出たことなどが指摘されている．さらには，コレラが流行する前に，疫病の流行を予言した

鳥の怪異（ヨゲンノトリ）が出現したという．

さらに，大末（2021）は，長府藩の医師・古谷道庵がコレラの治療にあたった様子を記した日記から，藩内のコレラ流行の様子，道庵の治療法などを明らかにした．日記によれば，長府藩でのコレラ流行は，安政 5（1858）年は 8 月 16 日に，翌 6（1859）年は 7 月の中旬から流行の記述がみられ，9 月には下火になっていたようである．また，前後の天候の記録や道庵自身の記述内容から，当該地域における感染拡大の要因として，少雨，漁村であるゆえに生魚の食用が多かったこと，祈祷・儀式・重陽の祝事による密集，医者の家で飲酒がおこなわれていたこと，の 4 つが関連したのではないかと考察されている．他地域の記録をみると，感染が拡大する以前や最中に洪水が発生した事例などもあるため，これらの要因が実際どれほど感染拡大に影響したのかは不明だが，日記の記録から流行の状況やその原因について考察することを可能とした事例である．

2020 年からの COVID-19 の世界的な流行により，さまざまな地域において疫病の歴史に注目がされるようになった．それによって，これまで取り上げられてこなかった新たな史料の発見や，既存の史料の再検討が進んでいる．次章で述べるように，こういった地域史料は旅と疫病の関係を明らかにするうえで重要なものであり，今後も研究事例の蓄積が期待される．

4　近世の旅と疫病の関係性

これまで，近世の旅と疫病の流行については，大きく関連づけて論じられることはなかった．近世の旅や名所にかんする研究の蓄積は多いものの（2 章），それらは疫病の流行や災害といった非常時ではない，通常時のものを対象としている．これは，疫病流行時に限定すると，分析対象となり得る史資料も限られるため，そういった制約もあると考えられる．

しかし，疫病史という視点からみた際に，旅と関連する事項は確認されており，そういった事例が徐々に蓄積されている．例えば，安政 5（1858）年の甲斐国の事例においては，名主の記録に「逸見郡中では街道を通行する者がいない」と，疫病の流行により街道の通行量が減少したことが指摘されている（中野 2021）．また，享和 3（1803）年に麻疹が流行した際には，「此年四月朔日立ニて，参宮ニ致し候．人の噂ニ，道中にて麻疹にて，難儀致候もの多く有之．道中筋茶店・（旅）篭屋抔大かたハ店を〆，休ミ居申候．夫故甚淋しく候．」（『至享文記』）との記録があり，街道沿いの茶店や旅籠屋といった旅人を相手に商いをしている店が休業していたこともわかっている（磯田 2020）．

反対に，疫病が流行したことで，神仏にすがろうと神社仏閣が賑わう例もある．高橋（2004）は，先述のとおり，駿河国の村人が吉田神社を勧請するために京都へ旅立った事例を紹介した．その際，津島大社（尾張国）が参詣者で賑わうのを見たと日記に記されていることに触れている．突然流行し始めた未知の疫病から逃れようと，多くの人々が津島大社に参詣したのである．同じように，コレラを管狐の仕業であるという風聞によって，三峰神社（武蔵国）へ御犬拝借のために参詣することも流行した（高橋 2003）．このようなブームは一過性だったのかもしれないが，人々のこういった行動は，疫病の流行と旅・名所の関連を考えるうえで重要である．

近世を通じて疫病の流行は幾度かみられたが，それにたいして幕府が移動の制約をおこなうようなことはなかった（安藤 2020）．しかし，疫病の流行を受けて，村レベルで移動への対策をすることがあった．渡辺（1997）は，安政 5（1858）年の信州諏訪の松目新田において，疫病流行下では，商人や勧進といったよそから来た者には一切取り合わないこと，流行病が終わるまで，職人仕事・商売・旅出などで病気が流行している村には出入りしないこと，やむなく出かける者は流行が終わるまで帰村しないこと，といった取り決めがあったことを述べている．さらに，鈴木（2021）も，駿河国大宮町の弥兵衛による日記の記述から，流行地域との往来を禁止する触れを出した村があったことを指摘した．

近代に入ると，疫病の流行の際に政府が移動を人々の制限する「交通遮断」がおこなわれるようになる．明治 12（1879）年にコレラが流行した際，京都では患者のいる家への病名票を貼り付け，患者を避病院へ送るなど，患者を隔離することで流行を防ぐ対策がとられた（小林 2001）．しかし，これには反発があったため，明治 19（1886）年に再びコレラが流行した際は，防疫策として町単位・学区単位での交通遮断がおこなわれたという．しかしこれも，市民生活や経済活動に干渉することになるため，多くの批判を浴びることとなった．

明治 10（1877）年代のコレラ流行と交通遮断について検討した竹原（2021）によれば，宮城県では，自主的に交通遮断を実行するような例もあった．反対に，地域によっては，交通遮断によって生活に不自由が生じることから，患者を隠蔽するといった行為も確認されている．県や政府内でもさまざまな議論が交わされたが，明治 19（1886）年になると交通遮断は重要な予防法として位置づけられていたようである．

以上のように，これまで別個に研究が進められてきた近

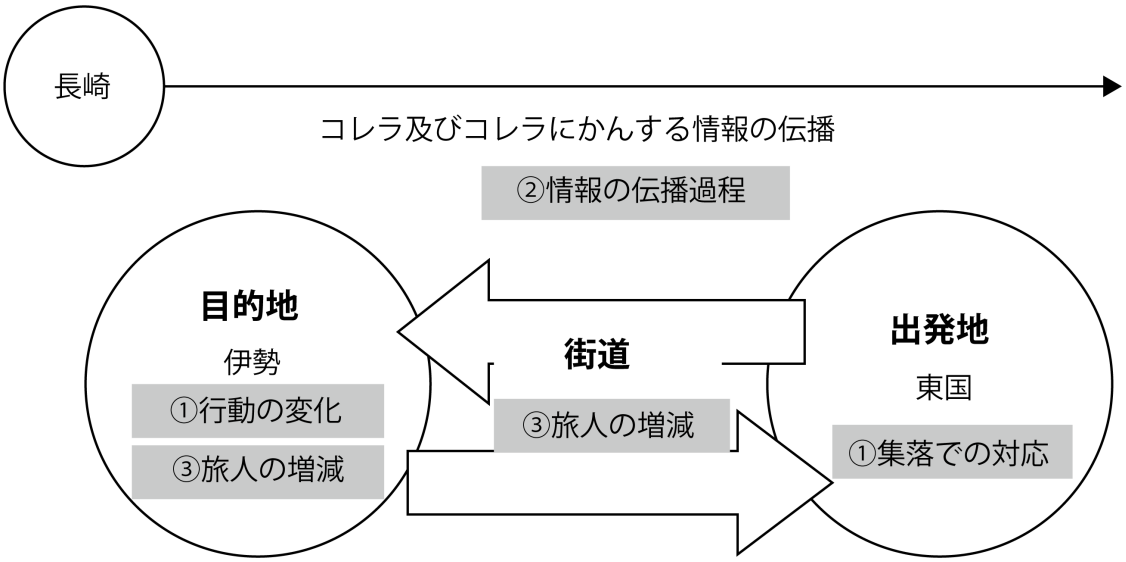

図１　安政５年のコレラ流行と対象とした旅と疫病の関係にかんする研究の枠組み

世の旅と疫病について，疫病にかんする史料のなかに，旅＝移動との関係を示すものがあることを確認した．これを踏まえて，これから旅と疫病の関係性を探っていくための視点を提示する．

5　おわりに

最後に，これまでみてきた既往研究の整理にもとづき，今後の旅と疫病の関係性を明らかにするための研究の枠組みを示したい（図１）[2]．この枠組みは，３つの視点から構成されている．図中①は，旅人の出発地と旅人自身の行動に着目したものである．ここでは，疫病が流行した際に旅人の居住する集落でとられた対応や，旅先における行動の変化の有無について検討する．先述のように（2.1），これまでの旅・名所研究においては，旅日記の分析により旅人の行動が復原されており，疫病史研究では，地域史といった視点で研究の蓄積がある．

図中②はコレラやその情報の伝播過程についての視角である．安政５（1858）年のコレラは長崎から東進したとされており，このような伝播の過程については，歴史地理学の分野でいくつかの論稿がみられた（3.2）．

また，疫病の流行下では旅人が減少することが推察されるが，図中③旅人の増減は，街道・もしくは旅の目的地における旅人の数について焦点を当てるものである．

疫病の流行下で人々の移動を制限する方策が広く実施されるのは，近代に入ってからだといえるが，近世においても，地域によっては村レベルで往来を制限するような試みがされていた．これは，図１のなかで，〈①旅人の出発地となる地域の対応〉に関連する事項である．こういった往来の制限は，既往研究をみる限り，商人や職人，宗教者にかかわる取り決めであり，伊勢参宮をはじめとした旅についてはどのように捉えられていたのかは不明である．このような地域の対応については，解明が難しいものの，地域史という視点からの研究の蓄積によって，地方文書や日記史料から地道に明らかにしていくことが可能である．

加えて，〈①旅先における旅人の行動〉についても探るべく，当該年次の旅日記の分析も進める必要がある．先述のように（2.1），旅日記を用いた旅の研究は進んでおり，平常時における旅人の行動についてはある程度明らかにされている．今後は，そのような平常時と，疫病の流行下（もしくは流行直後）の旅人の行動を比較検討していくことで，旅人のもつ疫病への認識を論じていく必要がある．

〈②コレラとコレラに関する情報の伝播〉については，先述で取り上げたように（3.2），安政５（1858）年のコレラ伝播にかんするいくつかの論稿がみられる．安政５（1858）年のコレラは，先述のとおり長崎から東進して江戸に達したとされており，ミクロな差異はあるとはいえ，菊池（1978）や野村（1994）はともにその前提に立って分析をおこなっている．しかし，渡辺（2021）は，コレラが長崎から侵入して江戸へ東進したのであれば，江戸より先に京で流行が発生するのではないかと，従来の長崎侵入・東進説に疑問を呈した．ここでは，乗務員のなかにコレラ患者がいたとされるミシシッピ号が，長崎のあと下田に６月13～24日に停泊していること，長崎で医師として働き，コレラの治療にもあたっていたポンペが，江戸・箱館におけるコレラ流行は，長崎とは別の感染ルートではないかと推測していたことなどをあげ，下田からもコレラが侵入していたのではないかと述べている．

安政５（1858）年のコレラについては，主に寺院過去帳を用いて各地の流行のピーク，コレラの伝播過程が示さ

れている．ただし，その伝播過程については，渡辺（2021）が指摘するように，さらに考察の余地があるものと考えられる．そのためには，コレラが伝播した各地における史資料の掘り起こしや，既存の史料の分析を進める必要がある．とくに，旅との関連を考えるうえで，街道筋にあたる地域を重点的に検討することが求められよう．

さらに，疫病が流行することで街道の旅人が減少し，茶店や旅籠屋が休業していたという記録がある（磯田2020）．これは，図 1 において〈③交通量の変化〉にあたる．街道の交通量や旅先における旅人を定量的に示すことは，旅人の数を長期にわたって正確に記録した史資料がないため難しい．しかし，宿場によっては旅人の往来が記録された大福帳が現存している．限られた階層の記録ではあるものの，これが街道の交通量を知る一助となるだろう．加えて，街道沿いの地域，宿場，旅先地域に残された史料から，その地域の様子や疫病への対応策について紐解くことも必要である[4)]．

以上のように，本稿では，「近世の旅と疫病の流行」というテーマについて，これまでの近世の旅・名所，疫病にかんする既往研究の整理をおこない，今後の研究の枠組みを示した．今後は，この枠組みのなかで，旅と疫病の流行の関係性を明らかにする事例研究を蓄積していく必要がある．

謝辞

本研究は，JSPS 科研費 JP21K20077 の助成を受けておこなったものです。

注

1）ヨーロッパでは，1785 年にマルセイユを訪れた旅人が，ペスト流行にかんする絵画を鑑賞し，1720 年にマルセイユを襲ったペストに思いを馳せるなど，歴史的な疫病を表象した絵画が旅人にとって鑑賞対象となっていたことがわかる（Walchester 2021）．

2）一定の国民の間に常住発生し，次期の区別なきことあり．これを風土病又は地方病（Endemien）と名づく．これに反して，一定の地方に，時期を画して，突如として発生するものあり．これを流行病（Epidemien）と曰う．その程度の最も峻劇にして，全国に渉り，国民の大多数を同時に侵すものあり．これを大流行病（Pandemien）と称す．（富士川游『日本疾病史』）

3）図 1 については，Leiper（1979）の観光システムの図から着想を得た．

4）本稿ではほとんど触れることができなかったヨーロッパにおいては，17 世紀から 19 世紀にかけて，イギリスの貴族の子弟の間で，フランスやイタリアへ旅をするグランドツアーが広まった．この旅は，ヨーロッパの観光旅行の発展に大きな役割を果たした．イギリスでは 19 世紀に蒸気機関車が登場し，トマス・クックが旅行会社を設立するなど，快適な旅行のための条件は整っていった．

一方で，この時期のヨーロッパも疫病と無縁だったわけではない．1720 年にはグランドツアーの目的地のひとつであるマルセイユでペストの大流行が発生し，1854 年にはヨーロッパでコレラが爆発的に流行した．マルセイユのペストについては，後年にマルセイユを訪れた旅人が旅日記に書き記している（Walchester 2021）．また，ヨーロッパにおけるペストの流行は，船舶を一定期間入港させない検疫という予防措置を作り出した．検疫の期間，旅人は船から降りることができなかったが，このような経験も旅日記に記録されたため，近代より過去の旅を明らかにするうえで着目されている．旅と疫病の歴史を考えるうえでは，日本の事例だけではなく，ヨーロッパないしは海外の事例についても検討していく必要があるだろう．

文献

青柳周一，2002，『富岳旅百景――観光地域史の試み』角川書店．

安藤優一郎，2020，『江戸幕府の感染症対策――なぜ「都市崩壊」を免れたのか』集英社新書．

伊藤恭子編，2001，『はやり病の錦絵』内藤記念くすり博物館．

磯田道史，2020，『感染症の日本史』，文藝春秋，76．

岩鼻通明，1987，「道中記にみる出羽三山参詣の旅」，『歴史地理学』，139，1-14．

上杉和央，2004，「17 世紀の名所案内記にみえる大坂の名所観」，『地理学評論』77（9），589-608．

内海寧子，2020，「創られる風景――近世大坂の名所と風景」中谷伸生編『風景論――東アジアから見る・読む・考える』，関西大学出版部，123-159．

大阪市史編纂所，1988，「至文享記」『近世大坂風聞集――至享文記・あすならふ・あすならふ拾遺』，大阪市史編纂所，69-70．

大末和廣，2021，「古谷道庵日乗にみる安政年間のコレラ流行」，『山口県地方史研究』125，47-61．

小野寺淳，1990，「道中日記にみる伊勢参宮ルートの変遷――関東地方からの場合」，『人文地理学研究』14，231-255．

川口洋，2001，「牛痘種痘法導入期の武蔵国多摩郡における疱瘡による疾病災害」，『歴史地理学』43-1，47-64．

菊池万雄 , 1978,「江戸時代におけるコレラ病の流行」『人文地理』30(5)，63-76．

菊池万雄, 1985,「庄内における江戸時代のコレラ病流行」『地理誌叢』27，1-6．

小林茂，2000，「近世の南西諸島における天然痘の流行パターンと人痘法の施行」，『歴史地理学』42-1，47-63．

小林丈広，2001，『近代日本と公衆衛生――都市社会史の試み』雄

山閣，15-37.
小松芳郎，1986，「道中記にみる伊勢参詣――近世後期から明治期を通して」，『信濃』，38-10，13-30.
酒井シズ編，1999，『疾病の時代』，大修館書店.
酒井シズ，2008，『病が語る日本史』，講談社.
桜井邦夫，1986，「近世における東北地方からの旅」，『駒沢史学』34，144-181.
柴田純，2016，『江戸のパスポート――旅の不安はどう解消されたか』，吉川弘文館.
鈴木則子，2012，『江戸の流行り病』吉川弘文館.
鈴木則子，2021，「安政５年コレラ流行をめぐる〈疫病経験〉――駿州大宮町桝屋弥兵衛の日記から」，『歴史学研究』1011，12-25.
薗田香融・藤本清二郎，1991，『歴史的景観としての和歌の浦』，ウイング出版部.
高橋敏，2003，「幕末民衆の恐怖と妄想――駿河国大宮町のコレラ騒動」，『国立歴史民俗博物館研究報告』，108，149-164.
高橋敏，2004，「安政五年のコレラと吉田神社の勧請――駿州駿東郡下香貫村・深良村のコレラ騒動」，『国立歴史民俗博物館研究報告』109，1-19.
高橋陽一，2016，『近世旅行史の研究――信仰･観光の旅と旅先地域･温泉』，清文堂.
竹原万雄，2021，「明治 10 年代におけるコレラ流行と交通遮断」，『歴史学研究』1010，10-21.
田中智彦，1987，「愛宕越えと東国の巡礼者――西国巡礼路の復元」，『人文地理』39（6），66-78.
田中智彦，1988，「大坂廻りと東国の巡礼者――西国巡礼路の復元」，『歴史地理学』142，1-16.
谷崎友紀，2017，「旅人の属性にみる名所見物の特徴――武蔵国から京都への旅日記を事例として」，『人文地理』69(2)，213-228.
塚本章宏，2006，「近世京都の名所案内記に描かれた場の空間的分布とその歴史的変遷」，『GIS――理論と応用』14(2)，113-124.
中野賢治，2021，「甲斐国における安政のコレラ流行と「ヨゲンノトリ」」，『山梨県立博物館研究紀要』15，13-26.
野村裕江，1994，「江戸時代後期における京・江戸間のコレラ病の伝播」，『地理学報告』79，1-20.
長谷川奨悟，2010，「『都名所図会』にみる 18 世紀京都の名所空間とその表象」，人文地理 62(4)，60-77.
原淳一郎，2005，「近世における参詣行動と歴史意識――鎌倉の再発見と懐古主義」『歴史地理学』，47(3)，1-23.
富士川游，1912，『日本疾病史』.（松田道雄解説，1969，『日本疾病史』，平凡社.）
松本純子，2000，「行き倒れ人と他所者 (ヨソモノ) の看病・埋葬――奥州郡山における行き倒れ人の実態」，東北文化研究室紀要 42，53-82.
山神明日香，2021，「安政六年宿駅のコレラ」，歴史研究，688，42-49.
渡辺浩一，2021，「安政コレラの感染経路を探る」，『REKIHAKU「歴史のなかの疫病」』，16-22.
渡部浩二，2013，「江戸時代の旅と越後の名所」，『歴史地理学』，55（1），2013，1-16.
渡辺尚志，1997，『江戸時代の旅人たち』，山川出版社，115-132.
渡辺理絵，2010，「近世農村社会における天然痘の伝播過程」，『地理学評論』83(3)，248-269.

Cliff, A.D. and Haggett, P., 1989, “Spatial aspects of epidemic control”, *Progress in Human Geography*, 13, 315-347.
Walchester, K., 2021, “Many and Dreadful Disasters: Mediterranean Travel, Plague, and Quarantine in the Late Eighteenth Century”, *Journeys: The International Journal of Travel and Travel Writing*, 22(1): 21-38.
Leiper, N., 1979, “The Framework of Tourism: Towards a Definition of Tourism, Tourist, and Tourist Industry”, *Annals of Tourism Research*, 404.
Smith, V.L ed., 1989, *Hosts and Guests: The Anthropology of tourism*, University of Pennsylvania Press.（市野澤潤平ほか訳，2018，『ホスト・アンド・ゲスト――観光人類学とはなにか』ミネルヴァ書房.）

（受理日　2022 年 3 月 1 日）
（せとうち観光専門職短期大学・助教）
E-mail: yuki-tanizaki@g.seto.ac.jp